

〔実践報告〕

平成23・24年度普遍教育科目「生きるを考える」を受講した
学生の学びと今後の課題長江 弘子¹⁾ 磯谷 有由¹⁾Report on Learning of the Student who Took a Lecture on a Liberal Arts
Subject 'It considers living' in the 2011-2012, and a Future ChallengesHiroko NAGAE¹⁾, Ayu ISOYA¹⁾

要 旨

千葉大学では、2007年から3年に渡り、日本財団の助成により普遍教育の教養展開科目「いのちを考える－医療の原点をみつめて」を開講してきた。この科目開講は医療系の学問を専攻する学生はもとより、医療以外の学問を専攻する学生にとっても人間としての在り方の洞察、緩和ケア、終末期医療に関する知識の獲得と終末期にある人々への理解の深まりという学びをもたらすこととなった。そして、2010年10月、さらに日本財団助成事業を「領域横断的エンド・オブ・ライフケア看護学の構築」という形で継続し、「生きるを考える」と新たに科目名を変更し引き続き普遍教育で開講した。

この2年間で500名余りの受講生があり、すべての学部の学生が参加していた。受講した「園芸学部」「法経学部」「教育学部」「文学部」医療関係以外の学部では2年間共に全体の60-70%を占めていた。受講後の感想から学生自身の身近な生活体験の中で「死」や「病氣」と向き合っている様子が語られていた。本稿では、「生きるを考える」の開講から2年経ち、科目の内容とともに受講している学生の学びを報告し、今後の改善課題や将来展望を述べる。

Key Words : 教養科目, エンド・オブ・ライフケア, 死生観教育, 生きる

I. はじめに

千葉大学普遍教育教養展開科目「生きるを考える」は、2010年より看護学研究科におかれたエンド・オブ・ライフケア看護学の事業の一つとして2011年から千葉大学の全学部学生を対象に実施されている¹⁾。この科目の開講は、目前に迫る高齢多死時代において次世代を担う若者がエンド・オブ・ライフケアについて学ぶ意義は大きいこと、社会的関心の高さに加え、終末期にある人々への理解を深め、一般市民に対するエンド・オブ・ライフケアの理念や緩和ケアに関する正しい知識の普及が必要である²⁾と考えられたからである。この科目の前身として2007年から3年間日本財団の寄付講義として千葉大学では「いのちを考える－医療の原点をみつめて」の開講がある。この講

義では個々の学生が死を自分のこととしてとらえ、講義を通じて今後の自分自身の課題を明確にすると共に、学習のモチベーション向上に寄与することが示された。また、死に直面する経験のない学生がほとんどであったが「対峙することを避けていた死を考える意義」、「自己を取り巻く人々との関わりの意味」、「終末期にある人々へのケアと関わり的重要性について」、「終末期にある人々を取り巻く医療環境の現実の課題について」学習されたことが報告されている³⁾。それゆえ、千葉大学看護学研究科においてエンド・オブ・ライフケアに関する研究をはじめ、全国のさまざまな探究的実践活動による学術的成果を教養教育の場で未来を担う青年に啓発することが重要であると考えられる。

本稿では2011年度より科目名と目的を新たに構成された普遍教育科目「生きるを考える」の概要を述べるとともに2年間の活動報告を行い、今後の課題を明確にしたいと考える。

1) 千葉大学大学院看護学研究科 エンド・オブ・ライフケア看護学

II. 「生きるを考える」科目構成の意図と学習支援システムによる相互交流型学習

1) 「生きるを考える」科目構成の意図

本科目は、「生きるを考える」とし、人間の尊厳を考え、終末期にある人々を支えるために、哲学、宗教学、NPO活動、終末期医療に携わる多彩な講師陣により幅広い視点で講義を展開する。本科目は「保健医療福祉の最前線で病いをもちながら生きる人々と支える人々の現場で何が起きているのか、様々な立場から人々の生きる力を学び、自らの今後の生き方や将来展望を考える機会とする」が科目開講の意図である。その学習目的は「人の尊厳、終末期にある人々を支えるケアを探求することにより、幅広く深い教養が身に付き、豊かな人間性が育まれること」である。さらに具体的学習目標として、以下の4つを掲げた。①人の尊厳とは何かを理解し、生きることの意義を実感することができる、②終末期にある人とその家族の心の有り様を深く知ることができる、③終末期を支える医療施設、福祉施設、地域でのケアについて理解することができる、④終末期の患者・家族を支える様々な職種について理解することができる、である。

このような意図のもとに科目の構成を考え、第一に終末期（エンド・オブ・ライフケア）という考え方が生まれた経緯と用語の定義、エンド・オブ・ライフケアを必要とする背景、それに伴って医療や地域社会がどう変わらなければならないかを伝えることと考えた。次に重要なこととして、がん患者のみならず多様な疾患の終末期医療について取り上げ、生と死を支える多様な療養の場において当事者である患者・家族と専門職が「最期までどう生きているのか、またそれをどう支えているのか」を取り上げることを考えた。2011年度、2012年度の講師一覧表を表1に示した。講師陣は、2007年から2009年までの3年間の日本財団の寄付講義¹⁻²⁾の講師で日本におけるホスピスケアの基盤を築いた山崎章郎先生、哲学者としての立場でグリーフケアと死の準備教育を発展させたアルフォンス・デーケン先生、人々の生活と病いと関連を明示し「生活習慣病」という用語を生み出した日野原重明先生を中核にがん看護、慢性疾患看護、老人看護、急性期医療機関の退院調整看護、在宅医療・訪問看護、福祉施設NPO法人などの様々な疾患や療養の場の異なる実践現場で「生きるを考える」ことをテーマに構成した。

2) 学習支援システムによる受講後の内省を促進する主体的学習の強化

この科目では、学生自身が講義を受けて、「生と死を日常の生活の中にあることを意識化し、生きることを考える」「考えたことを言語化する」ことに意味がある。そこで、千葉大学のMoodleによる学習支援システムを活用することとした。Moodleは、Webを通じて利用する授業サポートのシステムである。Learning Management System (LMS) と呼ばれ、授業外におけるWeb上での学生の自発的な学習や、教員と学生とのコミュニケーションを促し、対面授業を補完する有用なツールであるとされている。(http://moodle.chiba-u.jp/moodle13/mod/resource/view.php?id=753, 2013年10月14日アクセス) それゆえ、Moodle学習支援システムでは講義資料の提示、授業後の学習目標達成度を自己評価し、講師からの質問に自由記述で応えるレスポンス・ペーパーを実施した。このような学習環境は、単に受身的に講義を聞くだけでなく、自分自身の問題意識と対峙し、日ごろの暮らし方や家族との関係を振り返り、祖父母など身近な高齢者の在り様を想起し「生きる」こと、「生きている」ことを内観すると考えた。

III. 履修学生の概要と学生の学び

1) 履修学生の概要

2年間の受講学生の動向であるが2011年度の所属学部の割合は、園芸学部72名(30%)、法経学部45名(19%)、教育学部37名(15%)、工学部20名(8%)の順に多かった。医療系の学部以外の履修者が79%を占め、医学部、看護学部、薬学部は合わせて20名(8%)で全体の1割満たなかった。2012年度の所属学部の割合は、法経学部49名(22%)、医学部40名(18%)、文学部34名(15%)、教育学部24名(11%)、園芸学部24名(11%)、工学部19名(8%)の順に多く、前年度よりも医学部、文学部の学生の履修が増えていた。この2年間、他大学の大学院生の科目履修生が2名あり、放送大学の学生の聴講を含め毎回300名程度の学生が参加した。

2) 学生の学び

学生は主に課題レポートやレスポンス・ペーパー等で自分の思いや考えを体験として語り、その語りの中には学生自らの身近な死の体験や考えが表現されていた。同時に、聴講した学生同士がどのように感じたかを知りたいという相互交流を希望する記載も見られた。そこで2012年度は、学

表-1 2年間の講義内容と講師

2011年 講義者	所 属	2011年 講義内容
山崎 章郎	ケアタウン小平クリニック院長	ホスピス医の考えるエンド・オブ・ライフケア
長江 弘子	千葉大学大学院看護学研究科 特任教授	エンド・オブ・ライフケアとは
アルフォンス・デーケン	上智大学名誉教授	哲学・宗教学から捉えた「生きる」とは
谷本 真理子	千葉大学大学院看護学研究科 准教授	慢性疾患患者とその家族のエンド・オブ・ライフケア
櫻井 智穂子	千葉大学大学院看護学研究科 特任講師	がん患者と家族を中心としたエンド・オブ・ライフケア
佐藤 奈保	千葉大学大学院看護学研究科 講師	障害を持つ小児と家族のエンド・オブ・ライフケア
村岡 宏子	東邦大学医学部看護学科 教授	難病の人々と家族のエンド・オブ・ライフケア
日野原 重明	聖路加国際病院理事長	生きるとは
細矢 美紀	国立がん研究センター がん看護専門看護師	急性期病院におけるエンド・オブ・ライフケア
川越 正平	あおぞら診療所 院長	地域で生きる人と家族を支える診療所医師の考えるエンド・オブ・ライフケア
秋山 正子	白十字訪問看護ステーション 代表取締役・統括所長	在宅で療養する人とその家族のエンドオブライフケア ～どんな時でも命は輝く～
射場 典子	NPO法人健康と病の語り ディベックス・ジャパン 理事	健康と病の語りデータベースとは 一病を生きる人々の語りー
石飛 幸三	世田谷区特養芦花ホーム：医師	福祉施設における医療現場から、エンド・オブ・ライフ ケアを考える
川崎 千鶴子	北区特養みずべの苑：施設長・看護師	福祉施設での看取りを考えるエンド・オブ・ライフケア
廣井 良典	千葉大学人文社会科学大学院 教授	死生観・コミュニティとエンド・オブ・ライフケア
2012年 講義者	所 属	2012年 講義内容
山崎 章郎	ケアタウン小平クリニック院長	ホスピス医の考えるエンド・オブ・ライフケア
長江 弘子	千葉大学大学院看護学研究科 特任教授	エンド・オブ・ライフケアとは
櫻井 智穂子	千葉大学大学院看護学研究科 特任講師	がんと共に生きる患者と家族のエンド・オブ・ライフ ケア
谷本 真理子	千葉大学大学院看護学研究科 准教授	慢性疾患と共に生きる患者と家族のエンド・オブ・ライ フケア
射場 典子	NPO法人健康と病の語り ディベックス・ジャパン理事	健康と病の語りデータベースとは 一病いを生きる人々の語りに学ぶー
池崎 澄江	千葉大学大学院看護学研究科 講師	エンド・オブ・ライフケアを支える日本の医療制度
アルフォンス・デーケン	上智大学 名誉教授	生きるを考える～哲学・宗教学の立場から～
大岩 孝司	さくさべ坂通り診療所 院長	在宅緩和ケアにおけるエンド・オブ・ライフケアの意味
西川 満則	国立長寿医療研究センター 緩和医療診療部長	緩和ケアからエンド・オブ・ライフケアへのパラダイム シフト
秋山 正子	白十字訪問看護ステーション 代表取締役・統括所長	エンド・オブ・ライフケアを支える 一予防から看取りまで一訪問看護の実践から
今村 恵美子	千葉大学大学院看護学研究科 講師	晩年期にある人々とスピリチュアリティ・スピリチュア ルケア
桑田 美代子	青梅慶友病院 看護介護開発室長・ 老人看護専門看護師	高齢者のエンド・オブ・ライフケア
藤本 啓子	患者のウェル・リビングを考える会 代表	リビングウィル～生老病死と向き合うために～
木澤 義之	筑波大学 医学医療系臨床医学領域 講師	アドバンス・ケア・プランニング意思決定支援について 考える
日野原 重明	聖路加国際病院 理事長	生きるとはー私の100年の人生から学んだ生き方ー

合計 講師 22名

生の感想をリアルタイムで学生に伝える方法としてHPでの掲載を前提に感想文を書くモニターを公募した。その結果、6名の学生が承諾し15コマを担当し講義の感想を記述した。本稿ではHPに掲載された15感想を内容分析の手法で分析し「講義を受けての学びを内省している」内容を抽出した。学びの内容は以下の5つに分けられた。記述された言葉を「」で示した。

(1) エンド・オブ・ライフケアは死にゆくことだけでなく「精一杯生き抜く」ことと理解する

エンド・オブ・ライフケアとは、「死にゆくことだけでなくそれまでにその人が日々の人生を精一杯生き抜くことを支えるためにあるものなのだ」と述べていた。また事前指示、遺言といった言葉の意味や実用における効用を聞き「治療の遂行だけでなく、患者が自分自身を大切にケアの必要性を感じました」や「せめて<何をしてほしくないのか><自分の人生の目標はなんなのか、どのように生きていきたいのか><いざという時の代理決定者はだれにするのか>だけでも家族と話し合えればいいと思った。治療やケアのゴールについて話し合う時、目の前の検査や治療だけでなく、全体を俯瞰することが大切だということが印象に残った」と記載されていた。これからの医療が治療のみではなく、自分にとって何が必要であるかを考える重要性が受け止められたと考えられた。

(2) 家族の立場で病名告知や延命治療、最善はどうすることなのかを考える大切さを知る

「私の祖父はがんであった。病気の終末期であったら、どのように告知されたのか」と自分の家族に起こった出来事を振り返り、病名を本人に知らせることについて、どうすればよかったかを考え、更に「患者のケアはもちろん大切であるが、患者亡きあとの家族に生じてくる後悔や罪責感を少しでもすくなくできるようなケアを提供できるような医療が求められる」と看送る側の家族ケアを考えた学生もあった。

「胃ろうや人工呼吸器等の延命治療の是非は、一概に言えない難しい問題です」や「自分の最期について考えるのは怖いし、健康な時に、いざという時どのような治療をしてほしいのか考えるのはなかなか難しい」と延命処置の選択に関わる意思決定の難しさを実感していた。その上で「本人の意思を尊重するといっても、患者さんの言葉を鵜呑みにするのではなく、本人にとっての最善を家族とともに考え、深く話し合っていくことの重要性に気付かされ、自身の考えを整理する上でと

てもためになる講義でした」と、意思の尊重や本人にとっての最善とは何かを考える基本姿勢を学び取っていた。

(3) 死は不安だが家族の中で最期はどうしたいかを話し合う大切さを実感する

「死に対して現実味を持たずにいました。そして、今でも死に対して漠然と縁起でもないからと死から目を背け、考えることを避けている自分があります」という死に対する漠然とした不安を持ちながらも死を意識化している学生や「まだ遠いものと感じていたが、死を決して後ろ向きにのみ考えるのではなく、誰もが幸せな最期を迎えられるよう、考えていきたい」と自分のこととして考えていた。そして「人生の最期をどう過ごしたいかを考える事の重要性に気付かされ、そのことについて家族と話したいと強く思いました」という記述が散見され、学生自身が自分のこととして自分の家族や家族としての立場で「最期はどうしてほしいか」について話す必要性を感じていた。

(4) がん体験者の語りから、「それぞれの体験」を追体験し、自分の無力さと体験の語りの尊さを知る

体験者の語りは立場が一変し「患者さんの目線に立つものでしたので新鮮だったし、とてもリアルに感じることができました」「実際の患者さんの話を聞いて、思わず、涙が出ました」と体験者の語りから病いの辛さを追体験していた。そして「手術をどうするか、決断を下すのは自分が考えている以上に悩ましいことであり、難しいことであると感じた」「自分ががんであることを受け入れたり、手術の決断をしたりすることに対する辛さは、現在がんでない私が想像をしたとしても、本当に理解することはできないように思いました」と当事者の治療に関する決断のつらさを到底理解できないという限界にも気づき、「もし癌になったらどうなるというのは、実際の体験者の話を聞くと想像していたものとはかなり現実は違うことが分かりました」と述べていた。また多くの体験者の様々な語りがあることで「治療方法の選択や治療後の生活の変化などいろいろ悩むことがあって、また同じ悩みについても人によって全く考え方が違うので、いろいろな観点から癌という病気は人にどういった障害をもたらすのかということが理解できました」と病いの体験世界の個性や悩みの深さも感じていました。

(5) 今の自分の生活を振り返り時間の使い方、

人との関係、これからの自分について考える学生は「今の自分はいつもの生活が当たり前の

ように毎日繰り返される日々、それが自分にとってどんな意味や価値があるのだろうかと思わず、考えた。このように考えることがすごく新鮮だった」とまさに今の自分の生活や時間の使い方を振り返り、今の毎日、当たり前過ぎていく日常をかけがえのないものだとの生活時間の価値を感じていた。さらに、「人と語り合っただけで時間を過ごすことが、今の日常ではあるようでない」「ただ毎日の流れに流されている自分、いつも何かに追われている自分、周囲の人とかかわることをつい面倒に感じている自分を感じた」と自分自身が人とかかわりを意識しているにもかかわらず、流されてしまっていることに気づいていた。しかも、人と語り合うことについて「<考える>ことや<語り合い>は時間を止めてみるような感覚で、今の自分には貴重なことかもしれないと強く感じた」と忙しい日常で人とかかわりを意識化していた。

さらには「<苦しい経験からこそ、人に優しくなれる可能性がある>という言葉に心に留め、相手の気持ちに寄り添いこれからの日々を生きしていきたい」とまさに日々の過ごし方や生き方に目を向けて考え、学んでいる学生の様子がうかがわれた。

IV. 今後の課題と期待される科目内容

この科目では、2年間で約500名の履修者があり、すべての学部から参加していることが確認された。学生たちは、がんの体験者や死にゆく人の体験を知り、それを支える命の現場から「生きるを考える」ことを学んでいた。また学生たちは、課題レポートやレスポンスペーパー等で自分の体験として祖父母や両親の老いや病気を振り返り、家族としてどうすればよかったか、あるいはどうすべきかについて考えるとともに、医療制度や病院、老人ホーム、地域医療について知識を増やしていた。また遺言、事前指示書、エンディングノート、終活など、生き方を示す方法とその言葉に触れ、自分自身の日々の生活を振り返り、今後の生活について自分の将来を鑑みて考えを深めていた。また、Moodleシステムでは毎回8割の学生がレスポンス・ペーパーを活用し、関心の高さが伺え学生の主体的な学びを支える学習環境として効果的であった。

次年度以降への課題として、講義内容をより学際的にする必要がある。人間は死ぬ存在であること、死を身近な問題として考え、生と死の意義を探索し、哲学・民俗学・文化人類学・宗教学・芸

術など様々なアプローチで「生きるを考える」場を提供したいと考えている。また、より地域に根ざしたネットワークづくりやボランティア活動や保健福祉分野の活動紹介、当事者の体験を基にした講義など、講義陣の多様性増やすことも考えている。

最後にこの科目は、学生が人間の尊厳を考え、人間の死を学ぶことを通して生き方を模索する機会となっていることが確認された。医療関連学部でない学生も死を通して「生きるを考える」ことは幅広く深い教養が身に付き、豊かな人間性が培われることに寄与すると考えられる。更には、この科目を通して本学の学生が社会に旅立った時に自分を認め、自分を生かすとともに周囲の人たちとの豊かな人間関係を構築することができる人材を育成することが私たち教師の願いであり、エンド・オブ・ライフケア看護学の使命である。

引用文献

- 1) 長江弘子, 櫻井智穂子, 磯谷有由: 日本財団助成事業「領域横断的エンド・オブ・ライフケア看護学の構築」2010年度事業報告書, 千葉大学大学院看護学研究科, 2011.
- 2) 日野原重明編著, 19歳の君へ人が生き、死ぬということ, 春秋社, 2008.
- 3) 岡本明美, 眞嶋朋子, 増島麻里子, 渡邊美和, 浅井潤子他: 大学の教養教育課程における死生観教育の在り方の検討, 千葉大学大学院看護学研究科紀要, 33, p1-9.2011.